

福田和也

作家の  
値うち



飛鳥新社



## 作家の値うち

2000年4月19日 第1刷発行

著者  
福田和也

発行者  
土井尚道

発行所  
株式会社飛鳥新社

〒101-0051

東京都千代田区神田神保町3-10

神田第三アメレックスビル

電話

03-3263-7770 (営業)

03-3263-7786 (編集)

印刷・製本  
日経印刷株式会社

©Kazuya Fukuda

ISBN 4-87031-395-2

落丁、乱丁本はおとりかえいたします。

本書の無断複写・複製・転載を禁じます。

●定価はカバーに表示してあります。●

作家のイラストレーション: 相澤裕美

題本者: 鈴木一誌

作家の値うち

福田和也

作家の値うち

飛鳥新社

## はじめに

本書は、エンターテインメントと純文学双方の現役主要作家の、主要作品すべてについて100点満点で採点した、究極かつ前代未聞ぜんだいいみらんのブック・ガイドである。

文学作品を、「点数」で序列化する。

それが異例かんじゆであるのみならず、きわめて野蛮な行為だ、という批判は甘受する。

にもかかわらず、このような形をとらなければならない、つまりこうした形の包括的かつ単純明快な「評価」を提示しなければ、批評家としての責任を果たせない、という切迫感の下でこのような著作を世に問うことにした。



本書の発意は、約一年前さかのぼに遡る。

年来お世話になっていた編集者の小山晃一氏が飛鳥新社に移籍し、その機会に同社の土井社長と小山氏と食事をする機会を得た。

土井氏は、かなりハイレベルなワイン・マニアである。ドメヌ・ロマネ・コンティの、ル・モンラシェ'87、ラ・ミッシヨン・オーブリオン'78を御馳走になりながら、現今の文壇と批評きゆうじようの窮状についてこもごも話をしていた。

大ぶりのグラスから押し寄せてくる、粒つぶだった蜜みつとかすかなミントの匂いに圧倒されている時、何気なく土井氏が、「小説で、パーカーみたいなことができないものだろうか」と云った。

その瞬間、私は氏の目論見を完全に理解するとともに、自分が何をすべきか、いや、何をしたいのかがわかった。



ロバート・M・パーカーJr.は、現存のワイン批評家の中で最高峰とされる人物である。『ワイン・スペクテイター』誌をホー

ム・グラウンドにする彼の批評で、ワインの価格が大幅に左右されるほどその影響力は大きい。

中でも、その著書『ボルドー』（邦訳、講談社）は、ワイン批評のスタイルを決定した名著とされている。

『ボルドー』においてパーカーは、ボルドー地域のすべてのシャトーの、現在入手可能なすべてのヴィンテージ（生産年度）についてその試飲の印象を手短に記し、飲み頃となる時期を記した上で100点満点で評価を下している。「シャトーシュヴァルブラン'82、98点・成熟予測2010年、『ほぼ完璧なレベルのこのワインには、当てはまる言葉は見つかりそうにない』（平成元年版）といった具合にである。ワイン愛好家たちは、パーカーの<sup>たいぶ</sup>大部の数ページをコピーしたり、あるいは自分なりの抜き書きを作っては、ワイン・ショップに行き、値段と点数を含味しつつ、棚の前を歩きつ戻りつする。

パーカーのガイドは、買うためのガイドとしてだけでなく、愛好家がまだ飲まぬワインと、これまで飲んだワインについて思いめぐらす時のよすがともなる。もちろん、各人の印象が、常にパーカーのそれと重なるというわけではない。だが、印象が違えば違うで、パーカーの包括的で明快な評価は刺激になる。'78年のラトゥールをパーカーは92点とつけているが、せいぜい85点だとか、コス・デ・トゥルネルの'87年の評価が80点というのは低すぎる、という具合に。

土井氏は、この徹底的かつ単純明快なシステムを小説に適用してみたらどうか、と提案したのである。



土井氏の話に即座に反応したのは、私もワイン好きであるからばかりではない。

数年来、私は日本の文芸、とくに小説にかかわる評価の質

がきわめて低下し、かつ乱れてきたことについて、危機感を抱くようになってきた。

かつては小説の善し悪しについて、理屈以前に了解されているべき常識、文壇的な感受性といったものがあつた。そうした文学にかかわる常識が完全に崩壊しつつある、という危機感を強く抱くようになったのである。

どう見ても活字にする価値のない作品が、つぎつぎに権威ある文芸誌に掲載されるだけでなく、高名な賞を受賞する。一方できわめて優れた作品が、何の反応も評価も受けないままに消え去っていく。

こうした光景が、一部の偏向としてでなく、有力な作家や一流の編集者の構成する場の中心で行われているのだ。

そうした状況を改善する、<sup>くつがえ</sup>覆すことが、批評家の責任であることは云うまでもない。

私は私なりに、いくつかの連載やコラムなどで酷い<sup>ひど</sup>作品の受賞に抗議したり、そうした無理を押し進める大家<sup>や</sup>を<sup>ゆ</sup>揶揄したりしながら闘ってきたが、それは今までのところ空<sup>ひな</sup>しかった。

もっと総括的で、言い逃れしようのない形で、あるべき価値を提示しなければならない。

そう思っていた時に、土井氏の提案と出会ったのである。

たしかに、文学作品を点数によって階層づけすることは、文芸といった芸術作品にたいする評価という行為になじまない。審美的基準は数値などに還元できない、きわめて曖昧<sup>あいまい</sup>であると同時にふくよかなものであるし、あるべきだ。

私はこれまで、非客観的な価値のあり方に、むしろ過剰なほどこだわってきた。私のこれまでの、殊更<sup>ことさら</sup>に作品的な文芸批評のスタイルは、そのこだわりの現れである。

にもかかわらず、こうした試みを世に問うのは、文芸にかかわる価値の全面崩壊現象について、どうしても放置できな



いという危機感を抱いたからである。価値の有り様<sup>よう</sup>を、誰にもわかるように明示するという試みをしなければ、この崩壊を押しとどめることはできない、と思われたのである。高い価値を説く前に、まず常識の回復<sup>はか</sup>を図らなければならない。



本書は、パーカー・システムを小説に適用するにあたって、以下のような方式を採用した。

簡単に云えば、作家をシャトーとみなし、個々の作品をヴィンテージ(生産年度)とみなして、作品ごとに点数をつけたのである。

点数の基準は以下のようにした。

- 90点以上 世界文学の水準で読み得る作品。

---

- 80点以上 近代日本文学の歴史に銘記されるべき作品。

---

- 70点以上 現在の文学として優れた作品。

---

- 60点以上 再読に値する作品。

---

- 50点以上 読む価値がある作品。

---

- 40点以上 何とか小説になっている作品。

---

- 39点以下 人に読ませる水準に達していない作品。

---

- 29点以下 人前で読むと恥しい作品。もしも読んでいたら秘密にした方がいい。

以上の基準に従い、エンターテインメント、純文学、それぞれ五十人(計百人)の作家を取り上げ、各人一人六冊以上の作品を評価することを心がけた。

取り上げた作家・作品の選択は、現役主要作家の主要な入手可能作品とした。

現役作家に限ったのは、本書が批評的刺激を与えるという目的を担っているためである。物故作家を取り上げるのは、安全であるし、気楽でもある。だが、故人にたいしていかに厳しい判断を下そうと、あるいは肯定的な評価を下そうと、今後の日本文学の展開にはさほど大きな影響はない(もちろん無意味ではないが)。

小説の未来そのものを憂うという本書の目的意識からすれば、やはり評価は現役の作家にこそ向けられるべきだろう。そのため本書は、出版界のみならずマス・メディア全般に大きな影響力をもっている、通常ではまず批評の対象にならない大家、ベストセラー作家にたいしても、厳正な判断を下すことを試みた。

入手可能な作品に限定をしたのは、本書の評価が実際に読者が店頭で検証可能であるということを重視したこと、そしてバイ・ガイドとしての性格を重視したためである。たしかに絶版、品切れの本といえども、図書館、古書店を小まめに探せば入手、購読することは不可能ではないだろう。けれども、大多数が多忙な生活を送る読者層にとってそのような手間は過重な負担である。ゆえに、きわめて重要な作品(とくに純文学において)を逃すことを承知で、新本として入手不可能なもの、また全集への収録など入手に過重な負担が強いられる作品についてはこれを可能な限り省いた。そのために、「一人六冊以上」という基準を大きく下回る作家がいることは、評者としてもきわめて遺憾に思っている。

主要作家、主要作品という規定そのものが曖昧であることは、否めない。「主要」などという枠に客観的な基準などあるわけがないのは、たしかである。

取り上げる作家と作品の選択は、なるべく客観的かつ、社会的通念に沿うべく努めたが、どうしても遺漏や偏差があると思われる。

けれども、試みの性格からして、ある程度の絞り込みは避けることができない。たしかに、これほどと思われる作家の名前が数名落ちていると思われる。かような事態が出来たのには、いくつかの事情が重なっている。その事情の中で大きなものは、①取り上げるべき主要作品が入手不可能で、論じることが困難であること。②あまりに濫作して、なおかつその水準が低く、絞り込みようがないこと。③その存在感からして五十人という枠組みから落さざるをえなかったこと、などである。

付言しておく、本書の執筆のために評者は、取り上げた全作品を読了した。既に読了している作品も少なくなかったが、それらもすべてもう一度読み直した。評価の機軸を確立するためには、そうするしかなかったからである。

作家、作品の遺漏については、いずれまた機会が与えられたら是正することを約束して、読者の許しを乞いたい。



本書では、エンターテイメントと純文学の双方を取り上げた。

私は、もともと純文学畑の人間である。

ゆえにこれまで、いわゆる文芸誌(『新潮』『文學界』など)を執筆の舞台にしてきて、エンターテイメントが載る小説誌(『オール讀物』『小説新潮』など)ではほとんど仕事をしていない。

また、エンターテインメントの作品についても、ほとんど論評をしていない。

ただ、これは私がエンターテインメントを無視してきた、ということではない。

純文学と並行する形で、私は時代小説やミステリーを読んできた。いくつかの作品については、書評を書きたいと望むこともあったが、いくつかの例外(笠井潔『哲学者の密室』など)をのぞいてほとんど実現しなかった。エンターテインメント系の作家にたいしては、出版社が厳しい評価を下すことを好まない(純文学系も近ごろは厳しい評価から逃避する<sup>きようじ</sup>矜持のない大家、中堅、新進が増えているのだが)傾向が非常に強い。商売になっているからいいじゃないか、売れるのが第一で質なんか関係はない、という訳である。

だが、機会がないだけで、現在の日本文学の重要な部分としてエンターテインメントに継続的な関心をもってきたし、評価をする必要と責任を感じてきた。純文学とエンターテインメントは、その質を相互に高めあい、競いあうことが、日本文芸の隆盛の条件であると考えているからだ。

その点で私は、今日ある「純文学とエンターテインメントなど」という区別は関係ない」というような態度<sup>くみ</sup>に与しない。両者には歴然とした差異があるし、その差異があること、差異から生じる区別が、双方の発展・深化にとって必要なことであるからだ(両者の差異がいかなるものであるかは、本文中のコラムで論じる)。

ゆえに、本書がたがいに異質な二つのジャンルについて、ここで同一の基準で論じることは、相互的な刺激と見通しを期待してのことにほかならない。



批評家としては当然のことながら、評価において私は最善を尽くすとともに、できる限り無私の立場を取るよう努力した。ゆえに個人的に険悪な関係の著者についても尊重すべき作品については高い評価をしたし、親しい作家(例えばある作家は私の大学の同じ科の一年先輩である)についても、厳しい評価を下した。

にもかかわらず、私の評価に満足しない読者はたくさんおられると思う。それは当然のことであり、その反発から、それぞれが自分の価値基準について思いめぐらしていただければ、本書の目的の過半は達したことになる。

レストラン・ガイドにおいて、『ミシュラン』にたいして『ゴー・エ・ミヨ』があるように、本書にたいしても、対抗する評価のガイドが出現してしかるべきだろう。さまざまな評価が提出されることによって、文学の価値にたいする理解と議論は深まり、小説の読者層が<sup>たがや</sup>耕され、著者・編集者は緊張を強いられ、日本文芸の可能性は広がると信じている。

平成12年3月5日

福田和也

[凡例]

- 1=作家は、エンターテイメント編、純文学編とも、五十音順に並べた。
- 2=タイトルの次に記す年号は、初版本の刊行年を示す。
- 3=各作品末尾には、入手可能な文庫本・単行本、その他を示した。

はじめに	4
------	---

# I エンターテイメント編

浅田次郎	16	鈴木光司	70
綾辻行人	19	高橋克彦	72
有栖川有栖	21	高村薫	74
池宮彰一郎	23	田中芳樹	78
伊集院静	24	津本陽	80
五木寛之	26	天童荒太	82
井上ひさし	28	乃南アサ	84
逢坂剛	30	馳星周	86
大沢在昌	34	花村萬月	88
笠井潔	36	帚木蓬生	90
香納諒一	38	林真理子	92
北方謙三	40	東野圭吾	94
北村薫	42	藤本ひとみ	96
京極夏彦	44	藤原伊織	98
桐野夏生	48	船戸与一	100
栗本薫	51	宮尾登美子	102
小池真理子	53	宮城谷昌光	104
佐々木譲	54	宮部みゆき	106
佐藤亜紀	55	矢作俊彦	108
佐藤賢一	56	山口雅也	110
椎名誠	58	山崎豊子	112
篠田節子	60	山田太一	115
島田荘司	62	横森理香	116
白川道	65	連城三紀彦	118
真保裕一	67	渡辺淳一	121

コラム1=純文学とエンターテイメントはどう違うか……………32

コラム2=大衆小説の長さについて……………46

コラム3=「動機の不在」と「幼時のトラウマ」……………69

コラム4=通俗的であるということ……………99

評価を終えて……………230

INDEX(作品・評点一覧)……………234

## II 純文学編

阿川弘之……………	126	笙野頼子……………	174
阿部和重……………	128	高樹のぶ子……………	178
李恢成……………	130	高橋源一郎……………	180
池澤夏樹……………	131	多和田葉子……………	182
石原慎太郎……………	132	辻仁成……………	184
江國香織……………	134	筒井康隆……………	186
大江健三郎……………	136	富岡多恵子……………	189
小川国夫……………	139	中沢けい……………	192
小川洋子……………	140	日野啓三……………	194
奥泉光……………	142	平野啓一郎……………	196
加賀乙彦……………	144	藤沢周……………	197
金井美恵子……………	146	古井由吉……………	198
川上弘美……………	151	保坂和志……………	200
北杜夫……………	152	町田康……………	202
金石範……………	154	松浦理英子……………	204
久世光彦……………	155	丸谷才一……………	206
車谷長吉……………	157	丸山健二……………	208
河野多恵子……………	159	宮本輝……………	212
小島信夫……………	161	村上春樹……………	214
小林恭二……………	163	村上龍……………	217
小林信彦……………	164	村田喜代子……………	219
佐伯一麦……………	168	安岡章太郎……………	221
坂上弘……………	170	山田詠美……………	223
佐藤洋二郎……………	171	柳美里……………	226
島田雅彦……………	172	吉本ばなな……………	228

コラム5=新人賞の存在意義……………148

コラム6=文学賞について……………166

コラム7=純文学は衰退したか……………176

コラム8=書籍の流通について……………190

コラム9=作家の値うちは何で決まるか……………210

[Redacted]

[Redacted]

[Redacted]

[Redacted]

[Redacted]

[Redacted]

[Redacted]



# I エンターテイメント編